

論 文

## 長期入院患者の疼痛緩和に対する 精神的な関わり

西坂 智美・小西 紀子・源田 愛子

西方 加代子・山下 政美・西川 みどり

公立松任石川中央病院

### Psycho-somatic Approach for Pain Relief of Long-term Admission Patient

Tomomi Nishizaka, Noriko Konishi, Aiko Genda  
Kayoko Nishigata, Masami Yamashita and Midori Nishikawa

Matto Ishikawa Central Hospital

#### キーワード

慢性疼痛, 長期入院患者, 精神的な関わり, ゲートコントロール説

#### はじめに

2年前に脊椎腫瘍摘出術を受けた患者が除痛処置だけでは疼痛緩和されず、いまだに痛みによる不眠や呻き声をあげている現状に私達はどうか対応していけば良いか悩んでいた。一般的に痛みの要因として、疾患由来以外に、感情・不安・孤独感・思いを表出できないなどの精神面も大きく関与しているとされている。本研究は、慢性疼痛を訴える患者にゲートコントロール説を用いて看護介入することで、除痛効果が得られる事を目的としたものである。この看護介入の効果について報告する。

#### 方 法

##### 1) 患者紹介

70歳女性。135cm, 25kg。性格は、神経質で、優しく、話し好きの患者である。入院前は、夫との離婚、一人娘との死別により、約20年間一人暮らしをしていた。元々両膝関節症や頭痛により、痛みを感じ、市販の鎮痛剤を常用しており、鎮痛剤の多量与薬により、何度か神経科に受診している事もあった。近所付き合いは良好で、友人との

手紙のやり取りも頻繁に行っていた。平成9年11月より脊椎腫瘍の為、下半身麻痺となり、当院に入院した。同12月に脊椎腫瘍摘出術を受け、約2年間床上で入院生活を送っていた。同居家族がない為、入院中の世話は近くに在住の妹がしており、2~3日に一度来院していた。手術後2年経過しているにもかかわらず、昼夜問わず呻き声をあげ、痛みを訴える現状であり、その都度鎮痛剤を使用して疼痛緩和に努めていたが、夜間の睡眠状況は良好とはいえなかった。痛みによる精神的ダメージが大きく、友人との交流も疎遠になっていた。

##### 2) 慢性疼痛への「ゲートコントロール説活用介入」効果の判定および分析方法

- ・研究者が対象の経過を観察し、変化の特徴を抽出し、介入前との比較項目を抽出した。抽出された項目は「疼痛を訴える頻度」「坐薬の使用回数」「夜間のナースコールの回数」である。
- ・この項目を介入前後で比較した。

### 【介入前】

#### 疼痛を訴える頻度

一日中呻き声をあげ、就寝時間以降は特に頻回で、不眠を訴える。

#### 坐薬の使用回数

2～3回/日ボルタレン坐薬を使用

#### ナースコールの回数

就寝時間以降 8～10回

### 【介入後】

日中の呻き声は聞かれなくなり、就寝時間以降はほとんど呻き声をあげる事なく、十分睡眠もとれるようになる。

坐薬は使用せず、ビタミン剤を4回/日内服する。

就寝時間以降 1～2回

## 結 果

当初は坐薬を1日2～3回使用して除痛処置を行っていたが、痛みを訴え、呻き声をあげている現状であった。しかし介入後は、坐薬使用回数が減り、最終的には使用しないで疼痛コントロールができるようになった。又、坐薬はいらぬが薬だけは欲しいと言う患者の希望があり、ビタミン剤を1日4回の内服にした。睡眠に関しても、研究前は不眠を訴えていたが、「昨日はよく眠れた」などの言葉が聞かれるようになり、不眠も解消された。

## 考 察

ゲートの開閉は、その人の注意、不安、予期、過去の経験といった、その時点での認識や知識によっても影響を受ける<sup>1)</sup>、とある。この事より、私達はただ除痛処置を行うだけでなく「精神的な関わり」に看護の視点を置き、患者を全体的に捉え、理解し、患者と過す時間を多く持つことで患者との信頼関係を築いた。この関わりにより、ゲートを閉じる働きかけが出来たといえるのではないか。慢性疼痛を持つ人は、みじめ、失望、自信喪失、孤独、抑うつ状態に陥る<sup>2)</sup>、とある。私達の関わりによりこれらの感情を減少させた。それに加え、痛みを我慢させるのではなく、患者が希望する時に除痛処置を行い、痛みによる不安や恐怖心を軽減させる事で、心の安定を図り、精神面に良い影響を与えたと言えるのではないか。以上の事から、患者が抱いていたマイナス感情を軽減させ、プラス感情を引き出す事で、ゲートは閉まり、疼痛緩和に繋がったと思われる。

## 結 論

慢性的な痛みや、継続的な痛みのある患者に、ゲートコントロール説を用い、看護介入することで除痛効果がある。

## 文 献

- 1) 横田敏勝：ナースのための痛みの知識，南江堂，8，1998
- 2) 柳田 尚：看護に役立つ臨床疼痛学，日本看護協会出版会，49，1966